

氏名	王 雪陽
ヨミガナ	オウ セツヨウ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第578号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 [疊彩]（ジョウサイ）技法による立体彩絵の世界 彩絵陶磁器加飾技法における立体絵画表現と技術応用 〈作品〉 世界は人により始まる、人により終わる 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	豊福 誠
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	片山 まび
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	三上 亮
（副査）	東京藝術大学	名誉教授	（）	島田 文雄
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本論文において論述する主な内容は、陶芸分野の伝統彩絵加飾技法を進化させ、オリジナルの陶磁器装飾技法の完成過程および技法応用についてである。更に、その装飾形式と材料技術を総合かつ双方向的に研究し、私個人の創作経験とも融合することにめざして、創作の途中にある問題点を解決しつつ、具体的な分析と研究を行う。「疊彩」技法は私のオリジナル技法であり、現在の作品制作の中に主に使用している。この技法は色彩があざやかで豊富であり、細かい絵画表現ができるという技術上の特徴を備えている。さらに疊彩技法は高温焼成によって完成するため、通常の彩絵陶磁と比較して、飲食に供する陶磁器製品に利用した場合、より安全性が高い。他にも色の階調が明確で、顔料自体の量感を利用して立体感がある絵画表現を実現できる視覚上の特徴もある。「疊彩」技法の活用は伝統的な陶磁器の彩絵技術の表現力の幅を広げ、今までにない新しい視覚的刺激を与えることが可能である。

第一章は本論分を成り立てる重要な基礎になる「立体彩絵」という単語について。最初にこの概念を思い付く段階から最後にこの概念を創作の中で実現できる段階まで詳しく説明している。

第二章は「疊彩」の定義を行う。「疊彩」その名の由来であるが、いわゆる「疊」とは「重疊」を意味する。自身で調合した顔料を比率に従って、素地と同成分の磁土の粉末と釉薬の層と同成分の釉薬に加え、粘性があり、盛り上がった特殊な顔料を作る。この顔料の底色は、濃色、淡色の順に重なり合っ
て輪郭線の中に入り込むという技法である。この技法により絵付けされた図案の表面は重層回数の違いに従って、異なる凹凸感を形成する。完成後の作品の絵柄は、浮彫と同様の階層感を表す。平面の画面に立体効果が出せる上に、器全体の形状と上絵が互いに呼应し、幾重にも広がるような表現の豊かさと、趣が溢れるように満ちている視覚的效果を与えてくれる。

第三章は私は今回の卒業制作を通して、陶芸に携わって以来積み重ねて来た技術と思想の変革により得た経験を観衆の皆の前に展示し、私の拙作を高覧頂くと同時に私の芸術思想を体感して頂ければと考えている。

博士卒業制作説明

タイトル：..「世界は人により始まり、人により終わる」

卒業制作の創作背景：

この世界の本来の状態を言えば、人類はそもそも自然の一部分の存在でしかないのであるが、時が進む中、いつからかこの世界は知恵が最も発達した人類に支配されるようになり、さらにその知恵ゆえに少しずつ破滅の道を進みつつある。この人間を創造した自然の力を人類は神などに当て嵌めているが、同時に自身を生命の長と信じる人類は神が自分達と同様な外見の存在だと考え、あるいは神は自分の姿形を真似て人類を作ったという考え方を昔から持っている。私の理解において人類がこのように考えるようになったのは、この世界は自分達によって作られたと言う思想があったからではないかと考えている。しかしこれは、真実であろうか。人間は自覚なしに何億年という時の中で蓄えて来た資源を短い時間内で使い果たそうとしており、さらに他の生物や自然の領域に侵入することも大変多い。もしこのような状況が続いていくなら、自然の全てと人類の消失という運命を避けることは極めて困難となるだろう。このような言い方は使い古された環境保護の常套句かもしれないが、現在の世界が直面している深刻さを表せればと思い、自分の芸術表現と陶磁器という特別な素材を通して問題を提起し、一種独特な視覚体験によって、日常に存在しながらも実感し難い事象を観衆に見せられることを望んでいる。

作品の構成

作品構成についてまとめてみる。現在の科学及び思想哲学において、世界は「天(気・風)」・「地(土)」・「水」・「陽(火)」四大元素から構成されていると考えられている。そこで、私の今回の作品はこの四大元素の要素を用い、日本画と陶磁器を1組として、これを4セット制作してテーマを表現することとした。これは陶磁器を通して人のただ発展していない世界の様子を表現すると同時に、日本画は現在の人類と自然が共存している様子を表現する形式である。

多種類の成形技術を融合し、陶磁器造形と彩絵内容を同時にデザインして、論文タイトルの主点である「立体彩絵」という論題を実演したいとも考える。

(論文審査結果の要旨)

中国四川省からの留学生である王雪陽氏の博士学位論文は、「疊彩」(ジョウサイ)と「立体彩絵」という陶芸における独自の表現について論じたものとなっている。本論は陶芸における新たな概念と技術を提示したものであり、内容のみならず、論の展開や構成力の高さにおいて高く評価できよう。

論文は3章から構成される。第1章では、「立体彩絵」についての定義が論じられる。陶芸作品は基本的には立体と平面の装飾からなるが、立体と平面を融合させた新たな造形を目指すことが述べられる。そのうえで立体と平面を融合する際の基本的なストラクチャー、いわば設計図となる部分が提示される。特に宮川香山などの日本の近現代作家に影響を受け、それを乗り越えようとした部分の記述は興味深い。第2章は、「疊彩」の技法について、具体的な配合方法や表現手法が論じられている。この技法は、塗り重ねることによって立体感を感じさせる視覚的効果を加えることができるが、さきの「立体彩絵」の設計図を具体化するものであることが述べられる。第3章は、博士提出作品について論じられる。「疊」の意味する「重ねる」という行為は、実は発想段階においても様々なイメージや体験が折り重なって醸成されている点で共通することが述べられ、作者のユニーク、かつ豊かな表現力の根幹をうかがわせるものとなっている。

中国ではデザインを学んだということもあってか、論文の執筆当初から構成、展開ともに明快に整理されており、作品のみではうかがいしれない部分を十分に補うものであった。さらに執筆を重ねていくなかで、作品の構造、装飾、技法、コンセプトのすべてがバランスよく論じられ、最終的に実技系の学生による工芸の論文としては理想的な形となったと言えよう。日本語表現の限界や、発想にいたるプロセスについてはやや説明不足なところも残されたが、審査員の合意のもと、博士学位に相当するものと判断した。

(作品審査結果の要旨)

王雪陽の博士審査作品は、『疊彩』と名付けた磁器における独自の技法により、立体彩絵という新しいカテゴリーを打ち立てた。博士審査作品「世界は人により始まり、人により終わる」地・火・水・天の四作品は、磁器の立体作品と平面の絵画作品からなり、その圧倒的な密度により見るものを惹きつける。綿密に計画された構図と色彩を併せ持つ器物とフィギュアの組み合わせ、さらにその背景の平面作品との巧みな対比によりこのテーマがしっかりと構築されている。

「疊彩」という技法完成に向けての研究目的と内容は論文に詳しいが、宮川香山の写実的な貼り付け表現、板谷波山の葆光釉の質感やデザインの研究に飽き足らず、高火度焼成における彩色絵具の研究、器形に対して効果的な立体描法を構築することへと向かう。さらに表現の独自性を追求し、多種多様な加飾技法の総合的運用を目指すことが示されている。作者の言う総合的運用とは、計算されたコンセプトを実現させるためにあるもので、単なる個人的な感情の表出表現とは違い、作品がどのように鑑賞に至るかという客観的で冷静な分析と、綿密な原材料と焼成のテストによって成立していることを意味している。

世界は、地・火・水・天の四大元素からなるという中国の考え方にのっとり作品構成されているが、工芸的器形を持つ立体物では中国の古典の説話や民間伝承から主題を抽出し、平面作品においてはイラスト的表現で現代の世界をメタファーとして描き出す。

作者は日本の自由な制作環境の中で過ごすうちに、大好きな日本のサブカルチャーを取り込むことも、自身の育った中国の山村に思いを馳せることも同じ意識下において制作ができるように成長した。これは作家の資質として極めて重要なプロセスを経ていることを意味すると思う。

鑑賞者は、器物から予想をはるかに超えた技術的な完成を目の当たりにすることとなる。結果的に幾分使い古されたであろう「環境汚染」「人類の破壊的行為」というメッセージとも、改めて向き合うこととなる。充分、博士学位認定に相当するレベルの秀れた作品と認定する。

(総合審査結果の要旨)

中国からの留学生である。来日して五年の間に大きな変化を遂げた王雪陽氏が、修士課程当初に提出した、器面の全面を覆う極彩色に絵付けされた中皿の強烈な印象は、我々の思考に訴えるに、十分な力を秘めていた。

釉下彩と釉中彩そして釉彩を用いての絵画的表現は、修士作品で、その研究成果が発揮された。博士課程では、加飾技法の研究を深め陶磁器の立体作品への描画法について、実践による研究を重ね、表現力と技術力高めて来た。発想のヒントとなった明治期の陶磁器作家である宮川香山、板谷波山の二人を上げて「立体彩絵」の概念について第一章にまとめている。

「疊彩」の定義について論述した第二章では、「疊彩」が筆者の造語であり、その技法も創作した新技法に他ならない点について述べ、疊とは幾重にも重なっている意であり、絵付けに用いた彩料を重ねた回数の違いによって生まれる作品表面の凹凸が、浮き彫りと同様の効果を表すことに着目している。彩料の調合には、発色の元となる顔料の高火度での安定した発色をえるための独自の工夫がなされている。

第三章では、博士修了作品について述べている。作品タイトル「世界は人により始まり、人により終わる」は、自然界の一部であるはずの人間が、自然を支配し諸共に消滅するであろう危機的状況の問題提起を作品として表している。陶磁器作品と日本画を一組として、「天」・「地」・「水」・「火」の四組の作品から構成され、中国と日本の伝説や共通する神を題材にして、筆者が創作したそれぞれの神を主題に陶磁器では誕生をあらわし、人間の文明に翻弄される姿を日本画で表現している。

論文と作品の整合性が強く表され、論述、構成、展開共に優れている。又、作品は非常に緻密な制作と、構成力、表現力に抜きん出た秀作であり、博士学位に相応しい論・作である。